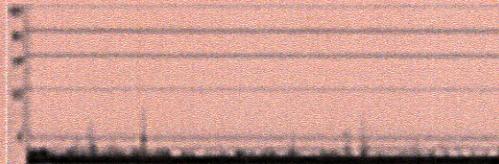
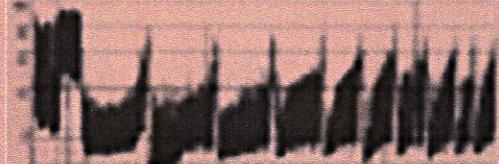


表1 aEEGのパターン分類	
continuous normal voltage	
discontinuous normal voltage	
low voltage	
flat	
burst suppression	
てんかん重積	

文献5より許可を得て転載 ↗10a M&G BBB

色80% ↗115秒

今号06-1
井上・杉山先生の
表1の左右115秒に!!

0.5 ↗15% 文献5より許可を得て転載 ↗11.5a見式MB 31⑩H

り、CNVの回復時間とBSの有無で低酸素性脳症の重症度を軽症、中等症、重症という3つに分類できると考えている(図3)。

このような重症度分類は、さまざまな臨床的スコアによつてもなされるが、脳波はリアルタイムの脳の状態を反映しており、より信頼度が高いと考える。

実際の運用

aEEGのピットフォール

モニタリングの誘導数 ↗280%
aEEGのモニタリングに用いる誘導50数であるが、心停止蘇生後の脳波の背景活動を評価する場合、頭頂部もしくは前頭部の単独の双極誘導のみでもある程度の評価が可能である。ただし、てんかん発作の検出には当然ながら少ない誘導での感度は不十分で、最近では当院でも8誘導でモニタリングしている。

aEEGをみるか、生波形をみるか ↗280%
強調すべき点として、aEEGをみれば脳波の生波形はみなくてもよい、とは残念ながらならない。てんかん発作の診断は最終的には生波形からなされる。また、背景活動の評価においてもいくつか留意すべき点がある。図4-Aはその一例であるが、図4-AではaEEGはCNVに見えるが、実際にはシバリングによる筋電図であり、筋弛緩後はflatとなっている。図4-BではaEEGではやはりCNVに該当するが、生波形をみると1~1.5Hz程度のperiodic dischargeがみられている。これを良好なaEEGパターンと判断してしまうと神経学的転帰を見誤る原因となる。

脳波の生波形が判読できればaEEGは不要と思われるかもしれない。しかしデジタル処理された定量評価であるが故に、評者間の差異が減り、非専門医の判読も可能となるなどの利点があり、ほかのqEEGとあわせモニタリングしたい。

